山田美妙著

孫に会ちねんみる事

天保版

236

逍遙文庫
文庫6
699

猪口合巻
第四
上
011702039012

諸名家高吟
詩名畫合作

隋唐
初版式

金三冊

天保九年
戊戌季春

藏板

口合諸人種子瓢開口
忽然顯作例趣向敲庭
尚穴探爻莫口為出次
第

天保四人題

文庫6
699

新撰亜口合種瓢序

近来亜口合盛行而初心輩毎得題欲吐妙句而取高點然無趣向之種則恰如以提燈搗餅徒費無益之工夫耳於豆中道而廢者亦不鮮矣野亭宗匠為之著一本名曰種瓢凡入用之故事来歴不餘不洩一〻具載焉初心輩能取種于此瓢中則不費無益之工夫而直入千變萬化之妙境奚疑之有不特初心輩雖老功煅煉天狗仙人之徒平生宜置一冊於手元以備吐妙句之媒於戲此書實從蔓一條至千生之種瓢哉

天保戊戌仲夏　世賢芝蘭子撰

世賢
蘭

總目録

一句案心得　二丁
一亜口合禁忌　三ウ
一遊字乃論　四丁
一切字　五ウ
一はまふ句　六丁
一湯桶よこ　七丁
一自他混雑　八ウ
一五十韻通仮名　三丁
一仮名づきの論　三ウ
一結句之事　五丁
一輪廻句　六丁
一句扑痛　七丁
一字音の差別　七ウ
一繪乃動難　八ウ
一雑描句　九丁
一同題同書　十一丁
一一字の勝劣　十一ウ
一亜口合諸体　十三丁
一口合文字大略　十五丁
一中華故事略解　廿四丁
一諸名家芳唫　廿三丁
一造亜　十ウ
一集亜　十一丁
一和歌題心得　十二丁
一亜口合十躰　十四丁
一倭故事略解　十五丁
一古紀詞　廿九ウ

總目次畢

亜口合縁
亜口合縁開巻の圖

亜ぐちあひすまうぐそ
亜口合相撲之
くわんのづ
開巻之圖
但滑稽社之
式ヲ摸

亜口合撞瓜

畫口合種飛卷之上

浪花　山田案山子著述

大意

口合をいひ〳〵を秀句とし〳〵但し和歌小秀句とし〳〵唐山ものゝ言葉の句ものゝ言葉を遂
諧語とし〳〵言葉に奥を催し頃を解るの秀句ものゝ言葉の句ものゝ言葉
絵口合を其起源画讃を口合ものゝ言葉にして権を弄り小ふぐ画詞
乃掛油ものゝ白隠禅ものゝ社自画自賛あり狐の嫁入相撲げさる図ものゝ
ものゝ狐〳〵ものゝかせてものゝ口合ものゝ
とあり是奴くまをせてこゝろとこゝろでせいとこゝろとこゝろを絵口合ものゝ
ものゝ〳〵ある〳〵。斯様のものゝもものゝ其頃已ものゝ流りせとこゝろもものゝ
天明寛政享和の頃画に合ものゝ壮ものゝ行れ狂歌ものゝ是を嗜せざる
人もなく神社の本殿拝堂の簷下絵に合ものゝ奉額あれをあれ
見ものゝものゝ絵ものゝを掛ものゝ中絵を絵合ものゝ。千羽雀

あんどいふて流りしくれぐれ見ぬ人は深く女ごころ乃
耳ホを入ぐれ友ホや見まのこと久しくも隔れば嘗時を好むく捧
ちり。独るホ秀砂社乃人々。文化乃頃より法口合を弄ぶ月ごホ
金會せしを。此道の中興とちりて仙馬群常暦社深世社
階藝社。芸多社其他群を集へ社を結ぶ好人挙てこぞ
見ひしくホ日平の清世乃余澤なるべし

○句乃案ど方乃開の事

法秀句ホさして定まる法式法ちり。只本文の言葉を將ドて百
般ホ句へ新名より通まて女童の耳ホも分て安く奥深ち事
いとあるべし。是ホ一乃心ばちり。先亜口合をせんと思ば。何ホも題
乃下社句より案を定べし。たとへば

上句 さくらうむきく　下句 ホ案ガ不　とよ

題の本文ちりで先下乃句の

未あんどい　とりて文句をいろいろと考へ

さて本文の結路ホよくあひしとれり句を案ど得あぜ真初ホ
つきて上の句乃

さくらうむきく　とりて本文ホよくひきあへ初をいろ
しと考へぶし。本のホ文ホよくひ十へ句ハ

さくらうむきく　之　絃之ハ法ぎく　紫檀掉　亜　之絃　湖竜

本の句先考え掉とり初を案ど得てさて之絃ちつぎくとりふ
上乃句を案どつ連續して天晴乃名句とあ。此格ホ句を
案ドあくだ句社とまを慣ホく。准ガ評ホもよく既るとのくさを定て
法口合ホ。ぎく奥の口合ホても初句をもホやさくとりくども下乃
句をいまホくとのくだ上の句よりもをしと出来る句もあれども。まづ
下の句より案ど法ぐぶ近反ちり。亜口合を勝ホ句乃とまり法をあるが
徒ちり。お撰五ちどの句を別て下の句より案どつ勝ぜよホて句の
ちりきあくさんど勝を得ぶし。極句法まるし

いのちながくあげてゆく　思ふ花名を書せて　花の名　色　なこ准　句者

右の句よくいひ切れる句の腰折り印歌をも

陽の〜釜の湯まで引　色句准　第九

句の句を腰折〜此等別をよく〜合得〜陸奥よく〜嵯ふ

とまれ〜ふ葉ぢ〜。又下の句金玉社で死妙句をはなぐ〜ぺふ

葉ぢでも上の句はそぢ。まそ上の句より死羽をはなぐ〜下の句出来ぢ。上

下ともふ佳句を得ても。中の一字二字亦何とも者ぐ死事あり。短歌の

人を退屈〜。打角好きる句を捨る事あり。見句はあるべ決して

ぐ〜ふ拾ぢ〜ぢ。せ句過て又〜葉もれぢ不堅お無の句を得る

ぐすみこのこと〜。意味〜葉ぢをえぢ佳句ハ得ぢ〜と思ふべ〜

○五十韻仮名通の事

重口合と葉ぢるふハ五十韻の仮名をよく暗記ぢ覚れぢ大ふ便となる

ものあり五十韻の仮名ふ図左乃ごと〜

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
え	れ	よ	め	へ	ね	て	せ	け	え
を	ろ	ん	も	ほ	の	と	そ	こ	お

○あかさたなはまやらわハあの音〜

○いきしちにひみいりゐハいの音〜

○うくすつぬふむゆるうハうの音〜

○えけせてねへめれゑハえの音〜

○をこそとのほもよろをハをの音〜

右十字ゞいづれの字もお亦ふ音多ふ

なり。壓ハ五音相通とて見も五字

づゝお通〜ぐも中ふハ口合ふ多りぐ記字も

ありて口合ふハ撲のお通とまふ用ゐぢ〜

右よく〜暗記ト扣けぢ當坐即席ふ甚助力となる〜たゞ〜む

俄路　城　散　鳴　なぐ〜特ど又　色　のつゞ葉まく用いろの字を撲お通の

字数中を特ず　糸　破　井戸　唐　姉

て仮名を片仮名にすれば仮名を千万言も自由ふいひ出さるゝものなり。

亜口合者一の迫乃あり。俱に亜口合中を仮名ちがひを禁ずべき猶口合ふ用

ひられ文字一二を初学乃人に便ふ下に巻ふ出を見合して知るべし

○亜口合禁忌之事

一御公儀様ふ対する事ゆめ〳〵云べ一博奕諸の付て社事忌べ

一男女閨情下ゞ乃事忌べ一雞病喪死葬式乃事忌べ

一刃傷毒殺の事　但し毒ふ亜口合一調伏不吉汚穢の事忌べ

一落首紙縛悪口なる事忌べ一高家の符帳諸乃方言忌べ

○仮名づまり社事

評者の氣ふよりて本文乃数の仮名を被きたる句を拙しとして

本文乃仮名を論ふ迫るべし。本文乃仮名を

づまりても名句ありと人の口碑ふ残し句ふ古人の句ふを

本歌ふ寄せ本歌ふ准句

又迫頂乃句ふて

つげのくしの　ちりまぢ　ちりまぢ　亜口合ふ金勢

一まちちりの　ちりちり　一つ〻乃社警を警乃中に日を多ふ

存の外本文乃仮名にまさる本文の字とづまる名句故挙をとる

皇あぶ鉦をとぶ〳〵拙しとして拙ふ道拙〳〵あるべし。

ぶ小ふを見を拙ぶ呂本文ふけ合づまる句を厭ふ乃べ

○遊字乃事　俗ふ性を

又評者ふよりて一字ふて本文ふ遊字を用ひる句を拙しと

いひくとゝぶる人ありぶ見もまき自己乃一癖なり。古人乃句ふ癖ふ

拾字多し。迫仲を用ひざる歟よりとまれども句ふよりて一字二字ハ
あるべ字あるも勝まて佳句なるべ。たゞ苦しうべたくて
すゞ兵衛東山　禪こゝ切なる素肌や赤ゑ　西あの私　李山
そふらふ五吏　こける三郎　五郎　きぎり　重一
右の和　挙てうぶくこゝ。或人の句ふ
市枝や枝の　梅乃花　判じ　昂智乃　武家の和歌　宗仕　梅の流
とりふ句をせゝめこゝふ。そ頂の寂議判ふ。むよくいひけいこゝ俱
武家の和ふ。と切少し耳こゝ。同こゝ梅乃和ふとせゝ面こゝ
ゐて天晴乗作なるべとこゝ。是をとりくまるゝ。本文の字を用
ぎめゝ所を。繁てゐるはこ。佳句もあくなる事ゐ句ふより
てこ拾字を用るも可なり。さゝもも本文乃頭字と句の頭ふゝくこ
よゝしの名句あゝゝこ遠亜こゝ。或人の句ふ

紗合のるより　ゐ合乃歟里人や億美　十百戎
右の句巧ふ。あゝこゝ。初句ハ頭より本文の字と二字ふこゝ用
こゝこ思こゝこゝ。句の頭ふ拾字ハ先亟まゝきこ角力ふゝ。ふハ
こふ損なり。初句ハ切字ふ本文の字を用ひざるゝより
○結句嫌ふこゝ。ゝ結句の事
前ふ。こゝ。法口合こ結句を略と止るゝふ。ゝ頭ふ
よりて止りの字の　の　あるべこ　ふ　甘ふ。こゝ。ふ。ふ。ふ

柳ハそどり　花ハくれの井　素丸を人ふ肌をふれまい　小町　要

きの せんよりの　あくまーを　退特　ぢ　丸乃あやまちぞ　忠信　四　呉調

右　まい　そ　などの切字あく止ーー友分乃きりり性くさしぬぞとて

ホ文のとめ乃仮名を用ひまづとい寄をあーび。月日も若ーーー

ざれども。おのーーむ文字り切字ぞて止れるめく

○切字乃事

ーー歌ぬも幾分ぬも切字ぬれを縁廻ーて嫌ーて。重に合もはー

事ぬく。切字ぬれを縁廻ーて嫌ーて。重に合もはー

ふを意のきれるぬ字ぬりり左のーー

ーー風佐字する。もれ孫ぐん。めり仮ふふ。ーそ。又。ぬり。ひきふもり

ふふ。さそ。や。か。つ。なー。ぬおんぬの。ー。ぬりれ。けあーれしさを

らん　俗ホ云でのーく　らーーー　俗ホ云ぬのきれこ。いざ。いき。いふいーぐ。いづーいどいづち

まど。まい。など　俗言。なぞ日上　なぜ日止。以上皆切字くまるー

ぢ。け。せ。て。ね。へ。め。き。な。よ。を。ぞ。以上十二字ハ下紐乃切

字ぬり。分乃とまりふーーー

いと梅乃花とふべき花を梅まつとふべかり

立ちのみもけぶり　社地ふ乳板を和るふ紙管絃　古撰書
あくまれん

いざらば雲なよ　風　まき出くふれたる佛づれ　准白
ろぶふまで

右いづれも白ふ出まりくる訓みてゆゆ苦。あまり乃多を多くつら
ねんとまれば訓つまるものなり

○白乃　痛とふ事

是ハ白乃字ふ和ふけ合を乃字ふ痛ふ字たるぬ為ふ用の字を
入るなり。たとへば人の身ふ痛ふあるあごく

白葉は　猿　河　富　士　や　准白
ちくさ　ふき

原一面　地ふ　まれきりく　は
ちくさ　ふき

おやの字　地乃字ともふ白乃痛なり。訓を濱のまゝ砂乃ごく深
くさぐさ　ふ　ぬ　ぬ

ふ　ぬ　ぬ　ぬ

字音によるでもよろしすと。理ある字素よまれい好まるべ

いぶきやくきの　うつのくを　惜き　教者のとろ道　を　忠見ぐ　三

右のおもりく理ある字素の句を字の及ぶ文字音ふらべるもと

ふりけ合さんとて。理ふ刻ふよのませるもぬまるべ

ふんきてねる　貝中　紙の性うるる　祇る　淮句

上ぐるや東山

宮三祇と字素よむ名を三祇と刻ふよませる新く文字書を

理ふ性ぬめるるるる。刻てもはるるる

げもものちろ　絵　畠　をひけ　茶湖　淮句

あとろ

ちちふ　ちて

うつまる

使　も　奢る　秀てうせるれ　芳俊

右のでく家相とよむ名を茶おとよませ秀てとよむ名を秀て

よまる頭ぬる。む字ふよてハ字素をつめてもいひ性ぬる音とりても

よむ字あり。景色を景色。女房を女房。山椒を山椒とよれも多

一又字ハ字音あるを俗通ふつまる音ふいひるハたるもあり大将

を大将とい奉公をまいとふ新もあまるあるふ苦しうべ只

勝ふ字音をぬめつめる音とのだいハ好まるべ

○自他混雑乃事

見を一句西方へ向へ　使者上ふ性く武威おそれ怖ぬ　軍中使者

時ふれ　紙そそ

周の宣王の　忠も雪猛乃一命をとりく　めで勝ち

前の句ハ使者の武威ふおそれる。使者ぶ敵の武威ふ怖るるふ

ぬぐく侵の句ハ雪猛の一命とり返を見るのすのぐく。ハ刻てとい字

八人の上社のぐく。皆物二ハ入組て自他混雑の雑ハ句ハいふも俗

通りて安き歌よりとい

○絵乃勅く雑の事

画合之法面白く句乃働をきくるを勿論なれども男句と
雪だ自然何の画と云れる事不作ると善く句ふよりて何の法
もまさる人又何の法も付申ある句あり是を画乃動く難と
云く秀逸ふかりつゝ絵の頭の動くとふ用ひ捨く

たゝみ中ねも　互い絡頁も　むぐすれ　（嫁花ぐさ八ノ目）
ぎゝうもよいうげん　綉　ル　よ　う　称　ぬ　画る　盆

右二句ゝも何の画も付句く法の動く難く但ゝ深世法ハ
此難きくあゝ

○画ふ書とりぐれ句の事

句ふよりて画ふ書とりぐれ句あり是も一ロの難なり

いたりゝ　新ふらふ　寄吳　此ゝ　曽呂利の支　（女良ゝ　女良ゝ）
（ロ方ふ人まる　しまうり）

もふ　死　ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

句の句乃ぐゝ寄吳と此を園。弘ゝと偽る画。ぐゝ描とり難く
うゝ用ゝ新味合の句ふ

ひゝとゝゝゝ　カ乃うげ　汐　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

右の句乃ごく醫坊ゞ蠶の掛物ふ案と借ぞる体。武士三人と楽
人八人ゞ合画ゞを造り設る奥いあるゆゑ。迫来ハ見へと好
まゞ。む煩俳ゞの産奥ふハ造絵乃句ゆて。矣を催ゞも奥あれ
ども。好んでゞきまゞきゞり

○同題同画乃事

たゞゞ通髭忠臣藏九冊目ゞ。帥也判官母傷の画乃句。
又菅原三陸月の通頭ゞ。師匠迫の画乃句ゞハ。如何ふ巧ゞふ
ゞ遠ても奥者きゞの見を以頭同画の雑ゞ。秀逸ふゞ
ゞ。好でゞまゞ。此難俳猫瘡髭ふ見ゞ其餘ふハ稀ゞ

○集画乃事

見き魚ゞの画。まゞふ野菜ゞ。其外組度乃鈎乃類ゞ多
く集て句を作る句者あり。稀ふゞ面白き句もあれども。多くハ

拙く奥者きゞのゞり。好んでゞきまゞ

○一字ゞて勝劣ある事

句ゞ上中下をゞ。喰ゞ者ゞ。宗二字仕仮名ゞ。好ふよく
付合ゞ。雪ゞと又ゞ。甘度。孫中ふ考ゞめふゞ
ゞ。絵の内ふ。紺用ゞ。暗門の奢
此句ゞ。ふ付ゞれども。ふちの。ゞふ。ふちふ。と付ゞ。ふ文
の乃と句乃に。とゞ付合ゞ。内も。ゞを可ゞ
ゞ。ゞを拉ゞが絶意 千年
句ゞ句ゞ。ゞを文。女ゞと。ゞふ。拉ゞが。と付ゞ
と。が。と音通ゞ。ゞ。見も。拉ゞの。ゞを。ゞ難ゞ。
句ゞふ切者の句ゞ。一字乃難ゞ。再喰の念足ゞる度ゞ。お撲句
ゞ。對人乃句ゞより一字乃弱ゞを頂ゞ。ゞ事ゞ

再唫し。仮名一字重ねきたる句作る事

○和歌頭に得の事

和歌の上の句下句を頭ふして連歌を作る事。なくむ

せず。頭ふとりて連歌の体を考ふるあり。なくむ

琴の音ふるものの　衣ぬふ梅の香ぬるる　准后

秋風ぞふる

きりのひまより　君も待日雪を見らん　ロ

くせなるべし

右の二句を天暦の名句あげつらひ。餘り連歌の体を考ひ

ぬるゆゑ。頭の句弱くして。連歌の体を考ふる頭の時も

曲を含みて。おのずから連歌と変ずるゆゑに。なくむ

さしこれの弓　月の桂乃糸ぬきかけ　准后　琵水

右の句乃ごとく紀を連歌の体を得ざるゆゑ。関白和歌頭ふる

結句乃てふをも乃仮名を字ふるに。連歌の動要なり。なくむ

あらさごろ　鉄槌ぬきふ打ものを右乃　西家　金勢

ものもものふしき　非のまふく　彦師乃弟理ふ仮乃　辛　千代　榊丸

右の句乃ごとくとまり乃仮名を字止せしに者の句遣なりを止乃

仮名を。変用ゆるとも著しうぶれども。角力を重ねぶ。結句乃まるら

きゝ体を勝をとるゆゑ

○連歌諸体〻事

ちゝ里句

やまとめ〻来の　雑用〻　来納を力乃やまりめ　素乃　錦早

町乃やしよめ

なまり句

ミ乃くぞを　虎　代　乃　民を事　練鼓　おゝ

あまえ句

にせむひを　神　人　二人　乃　爲お　を　生田川　其道

おくり字句

花のかをちくあるくん　尾乃永を此手樂ちる菴　准句其道

字あまり句

ちるくるくめくちふく　ふりくる尾乃方を志百　磁石用捨

短句

二二ゝ四　丸人　琵水

山を桂現　筆法根士　先天のづ紫好

長句

うるさむ志世一会乃生ゝり死ゝり　見見　芝蘭

仕ゝまゝゝて世ゝゝ志ゝで おゝふゝ

特ゝ志ゝ屋一色ゝんの

雪ハゝり散ゝを連ゝゝて

山ゝゝめ傘ゝゝゝ志ゝ

道戯句

見ハゝぎゝと志程ゝる造亜をゝりていゝふもゝゝく

ゝるゝ人ゝ猴をゝゝゝむゝる句を作ゝ一句乃奥ゝゝ

ゝゝゝゝゝ平句ゝゝ大ゝ愛体ゝゝ

ゝゝゝ乃ゝゝゝゝ

三蛇乃　尼あうひ　当丸

右ゝ志ゝ方ゝ一寸徳ゝ雷ゝゝ

仕ゝ紙の志を作ゝ筆で作ゝ亜

きのゝゝゝゝ

角力ゝゝゝ馬ゝ　淡水

右唐くと馬と角力と体亜ゝゝ

出ゝるゝゝふゝ

ゝゝのけく　お乳母ゝ小使ゝを滝の系く　琵水

右ハ乳母乃小使滝の系ふゝゝゝゝゝ亜

安敦体乃中。ゝゝ。ゝまゝ句。あまゝ句。乃三体を好でゝ歌ゝゝ

又短句小本文乃接字を用ゆゝゝ。乃戯句を平句ゝ系ゆゝも忌ゝゝ

○亜口合十体

洛口合ハ十体あんどくいくもつゝきゝ事有だゝ不ハあゝぐれた戯ハ
和歌の十体ハたゝ〳〵是まで愚撰ハ拔萃せ〳〵諸君の芳唫の中
ゆて十体ハ合〳〵とおの〳〵ゆ選出〳〵茲ハ挙るとゆ

長高体

ゆ乃ちゝ出ハ
あの泡
あのゝものゝこと
ふまもふく

帝代恭平乃三つの名　元日　紀者　蟹九
富乃ハ面のみゞわさく　負巻　今九

幽玄体

ゆ隔ゝさゝ
さのゝこゝろ
ホはやゆゝ
ゝの十

宮をさゞる源のあゝう　神の文　石佛
ゆゝや山家乃秋行秋　白ゝ准　湖龍

見様体

ゆゝゝのけ
ゆゝゝ

町乃景樽行系ハ六十八雁　こゝは脳　重一

そゝぎゝけて
ゝゝぬゝゝハ　そゝぐ侵ぐゝ〳〵ゝ蔵系　白ゝ准　樽九

濃ゝる体

蓋相思　紙ゝふ〳〵一産でゝ　産多　押照
道実云　二条を便利の金と銀と　白ゝ准　琴水
西ハげんゞの体不〳〵

有一節体

ゝ千余里の　絶ゝ言より行安宅ゝや　奇蹟　呂川
あゝゝゝゝゝ　絡ゝ巻ゝあゝ結ゝ紙　白乐天　蔵九
ゝゝゝたゝ

面白体

のゝゝゝめゝる　庶ゝを更ゝゝる十ゝと医者　白ゝ准　耻九
奴ハ巾　二店ハ貨物利銀の新定
むゝゝゝ二人の淳ハ

鬼拉体

様ゝゝゝゝゝ　大股ハ造ゝゝゝる朔人形　吳忠藻　入九
ゝゝゝゝゝゝ

降り分る車油煙る雷　夕立　景清

有心体

さゝ原の義理の意　よな桜　宝生
まけける合点四の一ぢいも　千さのぐり岩川　挑枝

事可然体

子供ある所を見乃ち　美語表　鉾山
高をだ賞美蓮乃仮　荷葉仮　呉調

○

霊しき体

松を鞠り篇まつと　白、准　定木
媒人そゞに振袖乃嫁　婚礼　今玉

○

諸名家芳唫追加

春の部

屠蘇出ても看ふ蓮菜　西年酒　鉾山
組重の暑年　始乃酒　同　今九
もの味を変一の元具　正月　樽九
野年ふ皆何ぞも注連　同　淡水
中ゝ持え新しか俤を注連　同　遊樂
何国も陽春祝ふ七五三縄　同　樽九
あゝむ新に春ゝ宿ゝ事の中　同　喜笑
蓬莱美くしく山ゝ望乃　同　一幸
加例で出ぬる三ツ新　同　如童
寄る娘出の羽根や付くゝり　准白　鉾山
羽根や年鞠に初ゝが出る　同　芝蘭
ゝ春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ　同　琵水

松あけに一二門乃婦　正月　歌竹
年弥祝俄ふさはるを鯛　月　笹書
古例羨しく美戈舞上　准白　樽丸
式乃表弱さぶの門く　月　あ玉
壽毎年乃市社笹　十日我　今玉
壽物も壽社山や皆ばり　月　芝蘭
大体風のまにほそぶ梅　准白　仝
芯ふかひらく壽ゲ白ふ　月　遊樂
梅窓ぢを紫艶　忘梅　鉾山
山林梅乃妙ちるふこの地　岡本　順戈
菴乃園生へ咲梅花　准白　芝一
ようう咲くうり新乃梅　月　あ玉
雅ふ紙ぐ中に梅と月　梅月　倉行

本文
おぼろまるふねや
よりの海

秀砂社
湖龍

枝
月や
社梅

名ぶ
俤
蝶
影清
橋本
輪羽
雛
其道
汐干
冬川
准勺
イロハ
箕春
一幸
如童
三橋
花見
三三九
雑糸
汐水
桃花
楊女
月
蝶
月
蝶
月
蝶

本文

三千年 生る桃をとり

秀砂社 舊邨亭 琵水

九鳳亭

子どものこゝろ
ひらどまつり
西の宮ハうゑ
ちりぐり

衣乃神に散りぎくり 紙因 義九
地主社庭ハ花えちり 湯若 琵水

夏の部

奇地やかさり乃ちゝ晒 さゝ玉 金勢
お粧迦崇めく甘茶ハ卯月 卯月八日 楊九
大子祝花して卯月でふる 日 淡水
蓑 卯月ふ 時 時多 其道
時 祭礼 稲 作ぐる 紙ケ系
時 稲 稲 歌竹
籠 花の むり 准勾 楊九
籠 花の 鯛
咲も 富貴を ふゝむ花ゐり 杜丹 淡水
咲 亀を つゝび亀が 蛍ごり 准勾 抱枝
庭ふを あゞめ 義ハ まぐゝ 日 黄竜
宵月の時 真 苔 山王祭 琵水

秀砂社

[illegible]の石峰

[illegible]

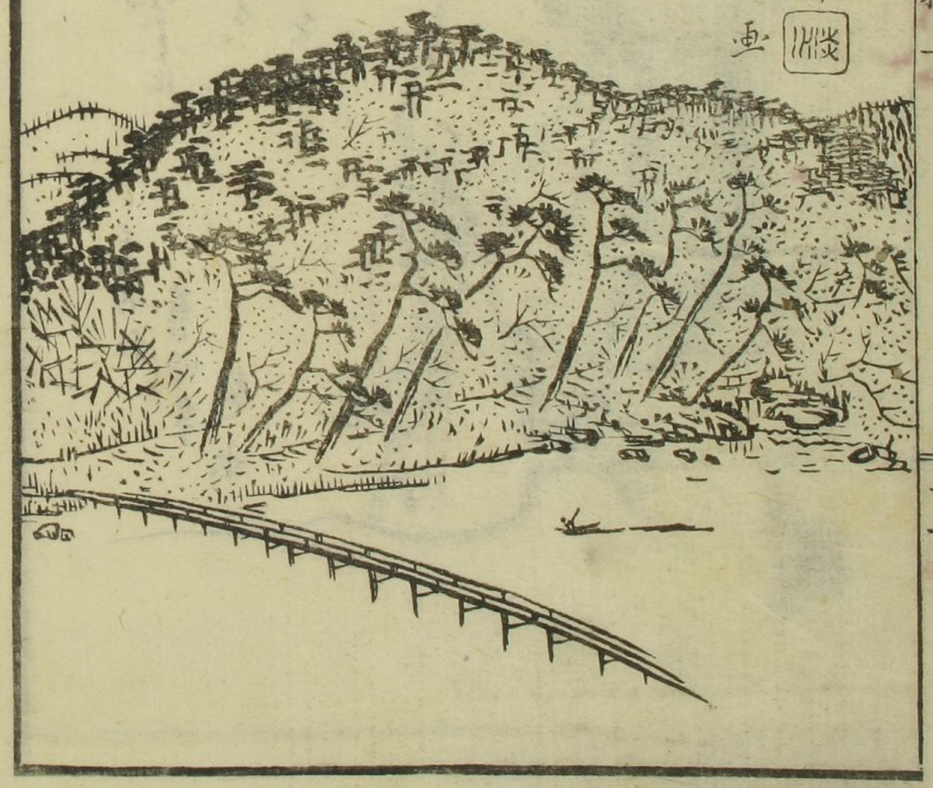
本文

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本文
かくやース
股引の五郎

ふ義左
麻布
ざるも

風凰社
庁葉撥
芦雄

野亭画

ぎおん舎　影清
今丸　湖竜
今丸　猪田彦
芝一　夏彩
今玉　あ玉
天神彩　輪羽
准力　今九
遊乐　箕善
淡水　桃枝

本文
あく素月日
ほすぐる

ナクメ
法用を
ぢくこ
黄乳ヲ紙少

秀砂社
玄乃条
遊楽

でんえよう
陸の十三
用をふりもの
たりとを
出家ふらりこう
気さへの老人
松風のまるぐ
秋はまびーまふ
うらのそけやき
あくすの木
ぞんれひのの
ふく井村
さめて長如の
おきくけき
本ハーねるれや
のぎんおさふい
ふんちくひめ君
たいくーふ
ねぐらに乳は
まずをえる
まふ風こて
ぐちのくり
つまえふきじや
ふ友のかく
名もおりろき
ところくー陸

納涼ハ紅よれ格のもし　准句　今九
麻れふもむや門の梅广　涼あま　今玉
涼くふ行くは四条の花灯　准句　歌仲
京義のお社るふ滝ハ涼しげふ　ハ　芝蘭
血ろを冷しむまい葛餅　ハ　淡水
難波旱魃のもそそ歌　馬色小町　むる
面で赤面ける　ハ　喜英
けとしいるやや射場押合　タを　琵水
海作日照ろ主の面　ハ　重一
泥中へちは紅蓮　茶　准を　箕青
児繊ともく井池の奥　川狩　今玉
漁る岸や小紅の　綱　ハ　仝
さもこのくき鮎の寺　綱　ハ　兼柄

秋の部

葉ごの霧(キリ)をあまねく秋(アキ)ふく　初秋　吳調
雾もけむるぞ秋ぐるる　月　影清
あがる間(アイダ)星の恋　七夕　其道
ゆーぬぐひ
うーもりのいもと
出てよむく　井戸ぐ　淡水
て秋ふるの
ふまくそぐち　踊子　吳調
ふるがまをへの
くろざし
たらくさぞの
つゆーかと　地花祭　琵水
去ふ病ーを
くふもせず　外坂祭　石佛
くもあがりの
絵巻乃内
あくあく長ハ
くおくり　准句　今玉
ぞそもも紀の
まちの本ハ
ふるの古山
ふるる

石山ふーを月を歩(メ)づ
古(コ)雅乃方(カタ)光の頂(スミ)の月　月　琵水
蔭(カゲ)ぬく月をきくふる　月　橘中
池沈(イケスム)月秋乃影(カゲ)や　月　三橋
秋乃月初を影(カゲ)ぐまも　月　湖竜

本文
ふるまい酒の
とぐるを
腰まへ
まぬ乃
懺さ

秀砂社
岸向亭
波之

ふりつ〻好きの
いくさこと
ひとつ〻と枯百
けしや如花
何ゝて松ハ
つゐふうゝ人
角やふすびの
ゝかざう
切つきゝふつ
つるぎの山
いまゝ月ふつ
一ちぢみ
ちぐゝの
一ちぢみ
ふゝふすめる
ゝまで
世ふあ工板の
笑ハゆゝ
ゝ足が
ゝきのこす
ふゝふすめ
せつきせた
笑ゝつゝ
世のゝ
ゝほやゝぶの
ゝしの下

菊こゝ月を天高田角
麿ゝと名の月出や芝原
秋の景遥連ゝ高麿
虫や帝ゝ
一分ゝ
ゝぶりゝ糸ゝき
菖蒲や風乃稲瓶乃糸
山ゝに作る田稲田ゝ
野ゝ作の出ゝ
笑乃入秋田苅種干ゝ
苗ゝ増種のゝ出来
菊ゝより沒の ゝき
菊ゝ階糸乃秋の庭

黄竜の月
遊乐月
其道
虫
芝蘭
千代の枝
准句
順之
淡水
秋作
菜摘
影法
川熊
菊扇
秋夜
三橋
其道

秋を多乃〳〵や菊ざけ　菊屋　鉾山
夏をうめ作里菊見〳〵　日　琵水
秋乃雪はつゝわ葉さゝり　日　楷九
秋芳ひ〳〵く多我菊乃　日　門太
秋徑〳〵木の葉も赤くゝり　孔葉　冬川
風ふく岸を萩ちゝぐ　立田川　湍羽
孔葉脱〳〵ふ山〳〵家の脳ゝ　准白　芝蘭
枯葉ちゝる渓流の底葉　日　三楷
ぬゝく葉赤く乃あゞめ乃面　西中　菊翁
鮒日に本の間雲ふく　秋一　仝
沙魚舟ゝふ木はの葉　准白　楷一
冬〳〵乃部
小河面ふ葉ゝ〳〵　時白

李文
どぢやうはおりく
難はたくし

湖上
追風
松はり
ちり

秀砂社
松月亭
影清

人間をつむ
あつ付たかを
とげらるく
ひいてうふや
もて乃曲
ふらひく
くづがきの
糸でもびて
太板でもて
もくめぐ二足
くくまりく
もきねの
中ふしもぎ
ふりさうでぐ
あしくぐ
もくすもくず
ちをの上
うりやうつの
うりの山
たくはもず
入月や
ちぐこをもぐの
どこやらぐ
いさこをくく
いきりひいち

着初を
口ッて小舅
昌江夏
呼田切
雑木
娘の
紡乃水
湖海
砂
菖蒲
門
雨
見
乾乃四方山
宛

被初を被
稚菊
遅
湖
夏木
准
波
三橋
如童
あふ
重一
蟹
イロハ
湖

谷間ハ蕨 冬山 菊
葉 山葵 乃雪
味噌 小鯛 鴨 茶碗 あゝ玉
二人りハふぎの 一くり 椽 准ゐ 鱸丸
きのびあい
ゝらいはけあき 梅餅 湖竜
ゝ代が炒も年の松 豆 節分 金製
豆 まめ 年を 寿キく 仝 金竹
接さいゝ 雑ゝ 仝 波之
投乃俵武ハ麦とゝ 仝 淡多
迫所海嵐を引ぎりまふる 仝
濱乃 和布 苅も武あゝ 茨竜 茶碗
和布 苅のゝ 引を 仝 菊
浪ゝゝ出乃荒和布 苅 仝 秀雀

画口合種 瓢上之巻畢